



アシュトン振付『リーズの結婚』でのアリーナ・コジョカル(リーズ)とヨハン・コボー(シモーヌ) Photo: Cristian Lăzărescu

ブカレストのヨハン・コボー

ルーマニア国立バレエの芸術監督を務めるヨハン・コボー。ブカレストを訪れたマイク・ディクソンがお話を伺いました。

コボーは公平で心が広く、自分たちに便宜を図ってくれるすばらしい上司であると、事前に多くのダンサーから聞かされていた。その彼の、建物の最上階にある天井の高い、専用テラス付きの執務室に足を踏み入れた途端、私はその広さに圧倒された。コボーは一つのランプで劇的に照らされた広いデスクに座っており、傍らのマットの上にはいつものチャーリーがいる(彼はじつは、犬の形をしたすてきな人間なのではないか?)。白いシャツの前を開き緩く締めたグレーのタイに、黒いベルベットのベストとお揃いのキャップというコボーはスタイリッシュで、低く穏やかな声で質問に答えてくれた。まず、芸術監督になったいきさつは? 「2013年の12月に私が演出した『ラ・シルフィード』をここで上演したのですが、初日の一週間前に総監督のラズヴァン・イオアン・ディンカに呼ばれ、誘われたんです。五日ほど考えて、お受けしました。ロイヤル・バレエを退団した後の身の振り方は考えていませんでしたが、どこかの組織に腰を落ち着けるのは自分の性には合わない。だから、最初は全くそのつもりがなかったのですが、『ラ・シルフィード』の初日に就任が発表されましたが、すぐ仕事を始めることはできませんでした。せめてスーツケース二つ分くらいの荷物は取ってこなくてはならなかったし、当面のレパトリーも決まっていなかつた。それに、劇場の改装のせいでシーズンがヶ月しかなかったんです。工事は7月14日に始まり、つい先日終わったばかりです。」

コボーは115人のスタッフを統括している。核になるのはルーマニア人だが、ダンサーには、ソリストのバーナビー・ビショップや数名のファースト・アーティストらイギリス人を含め、かなりの数の外国人がいる。「公開オーディションで選びましたが、普通はその前に予備審査をするので、これは珍しかったかもしれませんね。ルーマニアに来る気のあるダンサーがどれだけいるか不明でしたが、300人が関心を示してくれ、さまざまな国籍の15人を採用しました。ミュンヘンやベルリンなどからも応募がありましたが、トップレベルのダンサーを大勢抱えるほど公演回数がありません。面白いのは、団員たちが友達に団の様子を話してくれ、外での関心が高まっていることです。ここは以前から由緒あるカンパニーでしたが、国の政情のために困難な状況が続き、停滞していました。でも打開策は必ずあるはずだし、バレエ団のために僕もいい仕事をしたいですね。」

「ダンサーも観客も新しいものに飢えているので、それが仕事のやりがいにもつながっています。才能とやる気に満ちたバレエ団ですね。もちろん全員を満足させることは不可能ですが、ここをまず、自分自身が踊りたいと思う場所にしたい。僕は今でも、自分はダンサーだと思っているんです。」コボーが若いカンパニーにうまく溶け込めている理由は、彼自身が実演者としてもものを考え、ダンサーたちの野心や不安を共有できているからなのだろう。彼らの反応にもそれが現れている。「過去に何度か監督が交代していることもあり、残念ながら、この組織には不安が根を張っていたのではないかとも思います。現在の運営陣の中では僕がいちばん年寄りなのですが(笑)、今では若手が指揮を取り、やる気もエネルギーもある。決まりきったやり方で物事を進めるつもりはありません。僕はデンマーク出身で、ロンドンで14年過ごしましたが、ここがとても気に入っています。妙なことですが、くつろげるし、もう長く住んでいるような感じです。」

「劇場はチャリティ団体ではないし、節税になるとはいえ個人に寄付をしてもらうのはたいへんです。他の国で機能しているような財団がここにも必要なので、弁護士と相談して設立に動いているところです。国の賃金水準が低くても、ポワントを買うには同じ値段を払わなくてはならないですから。幸い支援者が増えてきて、総監督からも全面的にサポートしてもらっています。芸術監督としての初仕事に選んだのは、アシュトンの『リーズの結婚』です。傑作ですし、ダンサーには技術的なチャレンジの機会を与え、観客には今まで知らなかったスタイルに心を開いてもらうことが大切ですからね。」(訳:長野由紀)